

信濃毎日新聞



1873年(明治6年)創刊
 発行所
 信濃毎日新聞社
 長野本社 〒380-8546
 長野市南県町 657番地
 電話(026)
 受付 236-3000 編集 236-3111
 販売 236-3310 広告 236-3333
 松本本社 〒399-8711
 松本市宮田 2番10号
 電話(0263) 編集 25-2151
 販売・広告・事業 25-2153
 ©信濃毎日新聞社2011年

信州
 観光力
 33

高齢者の旅行・外出支援サービス会社 SPI 代表

篠塚 恭一さん



しづか きょういち 千葉市出身。旅行会社勤務を経て、1999年に高齢者外出支援サービス会社、SPIを設立。「あ・える倶楽部」の名称で運営している。NPO法人日本トラベルヘルパー協会の理事。長50歳。

第7部

きらりと光る県へ ④

始め、現在はノウハウをNPO法人に移し、検定試験を実施している。資格取得者は約100人で、長野県で活動している人もいる。

「SPIの年間取扱件数は約500件、孫に会いに行きたい、同窓会に出席したい」など目的はさまざまで、海外にも行く。特に東日本大震災後は利用が増えている。

「介護旅行の需要は。」

「介護旅行の需要は。」

「国内人口が減少する中、75歳以上は唯一人口が増えている年代。体が不自由で既存のツアーに参加できなくなっても、旅行したいという気持ちは健康な人と同じ。『残りの人生でもう一度』と想って出掛けると自信が付き、また行きたくなくなる人が多い。」

「車いすを利用する観光客の受け入れを断れば、一緒に来る人も逃す。同窓会だったら、何十人という規模だ。時間もお金もある世代で、災害や政治状況の影響を受けやすい外国人観光客と比べても変動要因は少ない。きちんと商売相手として認識すべきだ。」

「長野県は湯治で高齢者を受け入れてきた歴史があり、健康への関心も高い地域。信仰を集める善光寺もある。高齢者の旅の目的が多いのは羨望。『もうそろそろ行くから、お迎えをよろしく』とあいさつして、心を落ち着かせて死を迎える準備をする。『健康と観光』『信仰と観光』を売りにできるだろう。」

高齢者の旅行動向 リクルートエイピーロード・リサーチ・センターが昨年2月に全国の60歳以上3696人を対象に行った調査によると、「旅行に行きたい」と回答した人は94.0%（「ぜひ」「まあ」の合計）。ただ、このうち市販のツアーに参加するのに十分な体力・気力が「あると思うか」との設問に、「思わない」（「あまり」を含む）と回答したのは75歳以上で計41.4%に上った。

「一人に迷惑を掛けてまで出掛けたくないというのが、高齢者が旅を我慢する一番の理由。サービス業は本来、人の世話をし、商売する仕事だが、客は手を煩わせて申し訳ないと感じるレストランには行かない。受け入れる側が完璧なサービスを提供しようと身構えてしまい、客との間に距離をつくっているのではないかと。設備が整っていないくても工夫のしようはある。まずは受け入れて、本当に必要なと感じたら投資すればいい。」

「地域ぐるみで受け入れを進める動きもある。」

「静岡県東伊豆町では、観光協会がトラベルヘルパーを雇い、旅行したい人の相談に応じたり、利用客の入浴介助や徒歩の手助けをしたりしている。山形県最上町でも準備中だ。人材は一朝一夕で育つ必要はない。介護の仕事をしている人材は地域にたくさんいる。」

「高齢者の旅先としての長野県の可能性は。」

「『ゆっくりと死と折り合いを付けられる場所は、寺社や自然の中だ。僧侶らと対話でき、温泉に漬かって、おいしい物が食べられれば魅力になる。健康で売込むなら、健康に関する地域資源をきちんと『見える化』して生かすことが大切だ。短時間なら外出できるという高齢者もいる。呼び込まない手はない。」

「高齢者外出支援会社のSPIが手掛けている『介護旅行』とは何か。

「介護付きの旅行・外出サービスだ。介護がないと出掛けられない高齢者やその家族らが利用している。普段一緒に暮らしていないため介護の仕方が分からない、自分も高齢で介護できない」という家族もいる。体の状態に応じた日程を組んで手配し、当日はトラベルヘルパー（外出支援専門員）が同行する。」

「トラベルヘルパーは、介護技術を身に付けた旅の専門家だ。1995年に自社で育成を

健康「信仰」PRになる